三河における法然上人二十五霊場

山 本 博 子

はじめに

霊沢や大坂商人等により、宝暦十二年（二七六二）に巡拝された「円光大師御遺跡廿五箇所」は、法然上人二十五霊場のオリジナルな霊場（本霊場）とみなされ、江戸期から現在に至るまで、各地にそれを模倣した（うつし霊場）が設けられている。既に筆者は大坂・江戸・京都など一部の（うつし霊場）について報告しているが、本稿では、三河における法然上人二十五霊場の（うつし霊場）の特徴について明らかにしたい。

一 准西国廿五霊場

三河における法然上人二十五霊場の（うつし霊場）は、江戸末期に成立したと推定できる旧幡豆郡の巡礼がおそらく最初であろう。正空稿『廿五霊場講説』（筆者架蔵、墨付五十六丁、書名は小口書きによる。以下『講説』と略す）には、霊場名

を「准西国廿五霊場」とし、①桂岩寺、②阿弥陀院、③淨教寺、④徳受院、⑤西林寺、⑥崇覚寺、⑦信龍寺、⑧養林庵、⑨常光寺、⑩恵験寺、⑪不退院、⑫修福寺、⑬福泉庵、⑭福徳寺、⑮満国寺、⑯岩松寺、⑰光粒庵、⑱普門寺、⑲運照庵、⑳常福寺、㉑瑞用寺、㉒妙光寺、㉓養国寺、㉔東光寺、㉕養寿寺の札所を記す。この「准西国廿五霊場」は、西尾市から一色町を経て、西尾市に戻る右回りに札所が位置した旧幡豆郡の「郡巡礼」である。札所はすべて深草派の寺院で、①⑩⑪⑫⑮は三河十二本寺（十二檀林）に入り、⑨⑱が大本山円福寺の直轄寺院、他は檀林五ヶ寺の末寺である。③の（うつし霊場）を記す『講説』は、正空が四十八歳の安政六年（一八五九）に、霊沢の「円光大師御遺跡廿五箇所案内記」（以下『案内記』と略す）をもとに、愚仙の「円光大師御遺跡四十八所口称一行巡拝記」や義山の「円光大師行状画図翼賛」などを用いて、（本霊場）の各札所に関する由来や詠歌の内容を解説した稿本である。『講説』によれば、正空は常光寺の住

職になる前の嘉永三年（一八五〇）の二月十六日から四月十五日まで、岡崎市渡町の善国寺の実成と共に、〈本霊場〉および「西国三十三所」を巡拝しており、見聞したことを『講説』に記している。現在、この「准西国廿五霊場」は『講説』においてのみ札所寺院名が判明し、道案内記や詠歌本などの存在は確認できない。そのため〈本霊場〉の〈うつし〉の要素も不明である。ただ、その名称は、明治十六年（一八八三）に森三左衛門が刊行した『円光大師三河国廿五霊場大供養』（性源寺蔵。以下『霊場大供養』と略す）という一枚刷の史料で確認でき、「当国二往古ヨリ准廿五霊場アリシ処、中絶シテ知ル人少シ」と、かつて三河国に「准廿五霊場」があったことを示唆する文言がある。この「准廿五霊場」がおそらく『講説』に記す「准西国廿五霊場」を指すと考えられる。ただ、〈本霊場〉を「西国廿五霊場」と表現する例は、法然上人二十五霊場に関する史料の中では確認できず、唯一『講説』に見られるものであるが、〈本霊場〉が位置する地域は三河から見れば西国にあることから、このように称されたものと考ええる。「准西国廿五霊場」の発願者や成立時期についての詳細は不明であるが、宝暦二年（一七五二）成立の「西条吉良三十四番観世音菩薩順礼」の九ヶ所、江戸末頃とされる版本にみられる「善光寺如来三河国四十八願所」の十三ヶ所が、「准西国廿五霊場」の札所に含まれ、既存の巡礼の札所を取

り込んで新たな霊場を創設していることが分かる。ただ、〈本霊場〉を巡拝し、『講説』も草稿した正空が住職をする常光寺が「准西国廿五霊場」の札所であることからすると、発願者が正空である可能性も考えられる。その場合、成立時期は〈本霊場〉を巡拝した嘉永三年（一八五〇）以降、『講説』を脱稿した安政六年（一八五九）以前と仮定できる。

二 三河国廿五霊場

「准西国廿五霊場」に影響を受けて、新たに設けられた〈うつし霊場〉は、明治十六年（一八八三）に岡崎市両町の森三左衛門が発願した「三河国廿五霊場」である。前述した『霊場大供養』の緒言によれば、「古ヨリ大師ノ供恩ヲ仰テ、各国ニ二十五霊場ヲ立ル有リト雖トモ、此霊場タルや数百里ノ遠ヲ距リ、老幼ノ者巡拝スルニ殆ント困苦ス。因テ我父家田宗太夫深く此事ヲ慮リ、自ラ二十五ノ霊場ヲ巡拝シ、其五五ノ霊土ヲ乞テ、茲ヲ三河国寺院二十五ヶ所ニ納メ、准二十五霊場ヲ發起シ、老幼ノ輩ヲシテ等シク大師高恩ノ万分一ヲ謝セン」と欲し、森三左衛門の父親の家田宗太夫は、三河に「准二十五霊場」という〈うつし霊場〉をつくることを発願していたが、その目的を達しえず、嘉永四年（一八五二）六十三歳で往生する。病床にある父から「准二十五霊場」の創設の発願を遺言された森三左衛門は、明治十五年（一八八二）十

二月に故郷を出発、〈本霊場〉の各札所で納経し、霊土を賜り、翌年二月に帰郷する。そして、森三左衛門は明治十六年（二八八三）六月仏日に、巡拝が中絶し、その存在さえ知る人が少なくなった「准廿五霊場」を「再興シ改テ寺院番号ヲ撰ヒ定ムル者也」として、禅林寺龜空・円福寺廓空・大樹寺開

譽・三河悟真寺念譽・曼荼羅寺問空・伊勢欣淨寺一誉の六名の賛同者を掲げて、『霊場大供養』を刷っている。また、その緒言には「今回二十五ヶ所ノ寺院ニ乞テ、亡父ノ初志ヲ満足セント欲ス。伏テ冀クハ各寺院ノ諸賢哲、予力微志ヲ助ケテ賛成アラントヲ誠惶シテ祈ル。諸寺院御中」とあることから、『霊場大供養』は、以下に示す札所寺院に霊場の創設を乞う誓願状であることが分かる。しかも、明治十六年は森三左衛門の父の三十三回忌に当たり、「三河国廿五霊場」の発願は、法然上人への報恩とともに、父への追善供養のためでもあったのである。札所は、①性源寺、②浄久寺、③洞泉寺、④満福寺、⑤長善寺、⑥了運寺、⑦昌福寺、⑧十念寺、⑨実相寺、⑩誓満寺、⑪海徳寺、⑫称名寺、⑬妙福寺、⑭観音寺、⑮菩提寺、⑯了雲院、⑰松応寺、⑱行福寺、⑲阿弥陀院、⑳隣松寺、㉑常行院、㉒法雲寺、㉓長光（興）寺、㉔高德寺、㉕高月院である。順路は概ね豊田市↓知立市↓刈谷市↓碧南市↓安城市↓岡崎市↓豊田市と戻り、左回りで巡礼する番付となっている。西加茂郡・碧海郡・額田郡・東加茂郡の旧四

郡にわたる西三河の巡礼で、以前に設けられていた「准西国廿五霊場」の札所は全く取り入れず、新たな地域に、より広範囲な霊場を創設している。また、札所の宗派は④⑪⑬が深草派、⑤が禅林寺派、⑫が時宗、⑲が臨済宗であり、その外は浄土宗である。

この「三河国廿五霊場」の札所における〈本霊場〉の（へうつし）の要素を見てみたい。まず、発願者の森三左衛門が〈本霊場〉の霊土を賜るという「土砂の勧請」が行なわれている。そして、「一番 美作国誕生寺写 渋川性源寺」と記すように、〈本霊場〉の札所番付・寺院名をすべて対応させている。しかし、詠歌の記載はない。さらに〈本霊場〉の札所と共通の要素をもつ札所も見られる。例えば、奈良大仏写の⑪海徳寺は、廃仏毀釈で伊勢の神宮寺から遷座された大仏（毘盧遮那仏）を本尊としており、明らかに「大仏」を共通要素にしている。また、総本山知恩院写の㉕高月院は、徳川家康の始祖松平親氏の菩提寺であり、中興開山は知恩院二十五世となった松平親忠の子の超誉存牛であり、さらにその堂宇は知恩院も再建した徳川家光により再建されているというように、多くの共通要素がある。また、「三河国廿五霊場」は札所番外を多く設けるという特徴をもっている。一般的に（へうつし霊場）は、霊場の範囲を縮小化し、巡礼を簡易化するため、番外は多く入れないのであるが、この霊場では札所

以外に「写」とする九ヶ寺を含めて、二十一ヶ寺の番外を選んでいる。これらの寺院の中、伊勢国松坂樹敬寺写の来岸寺（⑤番外）、丹後国本願寺写の蓮乗寺（⑩番外）、京都鹿ヶ谷写の貞照院（⑬番外）、墨染欣浄寺写の光明寺（⑯番外）は、靈沢が『案内記』で札所番外として選んだ寺院の内の一部の（うつつし）である。鹿ヶ谷は安楽・住蓮が六時札讀を勤めた旧跡で、知恩院三十八世万無が弟子忍微とはかり、律による厳しい規則を定めた万無寺法然院である。貞照院は元法然院の末寺で、開山を万無とするが、事実上は忍微開山の浄土寺院であるという共通の要素をもっている。欣浄寺は三祖良忠の念持仏であった法然直作の御影がある。三河の光明寺との共通の要素は、良忠が開山である鎌倉光明寺と同寺名に求められる。岡崎源空寺（⑯番外）は、『案内記』の末尾に「附録番外之寺院」とする中の一つで、法然が遠州桜が池に赴く時に止宿したところである。また、森三左衛門は『案内記』で番外ではなく単に紹介されている寺院も「写」として取り入れ番外としている。嵯峨祇王寺写の乗雲寺（⑩番外）、播磨国時光寺写の常行院（⑪番外）、摂津国須磨寺写の清浄院（⑫番外）である。また、森三左衛門が独自に「写」として撰んだ寺院に、京都西院河原写の無能寺（①番外）、蛸薬師写の長福寺（⑬番外）がある。さらに「写」としてではなく、単に番外として撰んでいる寺院がある。例えば、尾張国祐福寺（④

番外）は宇都宮頼綱の創建といわれ、「円光大師画像」がある。その他、大樹寺、九品院、信光明寺、円福寺なども番外として選んでいる。このように霊場設立時に番外を数多く選定することは、靈沢の『案内記』に見られる番外の選定の仕方に影響を受けたとも考えられる。また、（うつつし霊場）の多くは、巡拝日を限定し、巡礼の非日常性を演出し、霊場の価値を高めようとしているが、「三河国廿五霊場」も巡拝日を毎年旧三月十三日から二十六日までの二週間に限定している。このように「三河国廿五霊場」は（うつつし霊場）を創設する手だてにかなりの工夫の跡が見られるが、寺院側からののはたらかけで霊場が設けられたわけではなく、在俗の個人の発願であるために、札所寺院の巡礼者への対応が積極的であったかどうかは分らない。

三 法然上人三河二十五霊場

昭和四十九年（一九七四）の浄土開宗八百年記念に「法然上人三河二十五霊場」が創設されている。霊場の設立経緯の概略は以下の通りである。浄土宗三河教区により、昭和四十七年（一九七二）十一月から「二十五霊場奉讃会」が組織され、計画が立案され、具体化への道が始まる。翌年四月には二十五ヶ寺の札所・番付が決定され、〈本霊場〉の靈土拝受の仕方、標柱（標石）、案内書（参拝の栞）、写経用紙、納経用

印判、納経帳などの作製について具体化が進められる。八月には大樹寺において、集められた〈本霊場〉の霊土拝受式が行なわれた。十一月には住職・総代による霊場参拝が協議され、二十五霊場の紹介ポスターが配布された。翌四十九年三月、各札所に札所標石を建立し、ここに霊場が成立した。札所標石は、統一形式のもので、正面に、「法然上人三河二十五霊場／第〇番〇〇寺（院）」、裏面に、「浄土開宗八百年記念／円光大師二十五霊場霊土拝受／昭和四十九年三月建立」と刻まれている。六月には、各寺につき二名（住職および檀信徒代表）の参加による二十五霊場巡拝見学会が二泊三日で実施された。さらに八月には、表紙に『奉納経／法然上人三河二十五霊場／住所／寺名／志主』と印刷されたB5判の納経帳（朱印帳）が刊行され、霊場巡拝の形式が整う。この納経帳も統一形式で、各札所とも、「第〇番／奉納経／本尊阿弥陀如来／元祖円光和順大師／詠歌／所在地／寺院名」と印刷され、奉讃会で統一した札所番付印、各寺院の宝印、寺院印を押すようになっている。

以下、札所を示すと、①高月院、②松明院、③信光明寺、④昌光律寺、⑤随念寺、⑥大聖寺、⑦大恩寺、⑧大善寺、⑨光明寺、⑩悟真寺、⑪普仙寺、⑫真如寺、⑬栖了院、⑭縁心寺、⑮貞照院、⑯誓満寺、⑰昌福寺、⑱洞泉寺、⑲弘誓院、⑳随応院、㉑性源寺、㉒隣松寺、㉓行福寺、㉔九品院、㉕大

三河における法然上人二十五霊場（山 本）

樹寺である。順路は豊田市↓岡崎市↓御津町↓新城市↓豊川市↓豊橋市↓渥美町↓西尾市↓碧南市↓刈谷市↓豊田市↓岡崎市と、基本的には右回りの巡礼である。札所は浄土宗寺院のみで、前述の「三河国廿五霊場」の札所からは、高月院、誓満寺、昌福寺、洞泉寺、性源寺、隣松寺、行福寺の七ヶ寺を取り入れ、さらに東三河まで霊場の地域を拡大させ、ほぼ旧三河一国の「国巡礼」となった。

この「法然上人三河二十五霊場」の特徴は、〈うつし霊場〉を創設する基本的な手だてが踏まえられていることである。まず、霊土拝受という〈本霊場〉の土砂の勧請を行っている。次に札所番付・札所寺院・詠歌がすべて〈本霊場〉と対応している。さらにその上で、すべてではないが、〈本霊場〉の詠歌の詞の中に、三河の札所寺院との共通の要素を見つけて、札所が選定されていることである。例えば、⑦大恩寺は御津町にあり、山号も御津山である。一心寺の〈うつし〉で、詠歌「あみだぶというより外は津の国の なにはのこともあしかりぬべし」の「津」が共通である。⑪普仙寺の院号は「光照院」である。東大寺指図堂の〈うつし〉で、詠歌「さへられぬ光もあるをおしなべて へだて顔なる朝がすみかな」の「光（照）」が共通である。⑲弘誓院は嵯峨法然寺の〈うつし〉で、詠歌「ただ頼めよるづの罪は深くとも わが本願のあらんかぎり」の「誓（本）願」が共通である。⑳随応院の山

号は極楽山である。誓願寺の（うつし）で、詠歌「極楽ははるけきほどと聞きしかど つとめていたる所なりけり」の「極楽」が共通の要素となっている。このように「法然上人三河二十五霊場」は（うつし霊場）を創設する基本的な手だてが揃っている数少ない例であり、しかも、現在でも巡礼されている（うつし霊場）である。

おわりに

江戸期から現在までに成立した法然上人二十五霊場の（うつし霊場）は三十余と少ない^{8,9}。また、それらすべての成立時期や全札所名などが判明している訳ではない。そのような中で、三河の場合は、同一地域（一國）内に三ヶ所の（うつし霊場）が確認でき、しかも、そのすべての札所名が分かる珍しい例である。しかも、三河の（うつし霊場）は既存の霊場に影響を受けながら、時代の経過とともに、新しい霊場が範囲を拡大して創設されていくのである。現在、一地域内における法然上人二十五霊場の（うつし霊場）の相互関係が確認できる例は、三河の他には肥前のみである。限定された比較例ではあるが、大正二年（一九一三）に成立した「肥前二十五霊場」では、江戸期成立の「肥前国二十五拝」の札所を取り込みながらも、霊場が存在する範囲は縮小するという三河とは正反対の現象が見られることを付記しておく⁹。

1 「大坂の法然上人二十五霊場―その成立と展開―」『中外日報』平成一四年一二月一〇日付、「江戸の法然上人二十五霊場」『同』平成一五年五月三日付、「京都の法然上人二十五霊場」『印度学仏教学研究』第五二巻第一号、平成一五年。

2 『講説』では、札所番付は漢数字で札所の右上に表記されているが、ここでは丸中数字で表記した。

3 『深草史 改訂版』浄土宗西山深草派宗務所、昭和五五年。

4 正空は西尾市川口町の常光寺十八世の正空俊雅。前住職は嘉永七年（一八五四）寂であることから、正空は、それ以降、慶応四年（一八六八）寂までの十四年間住職であった。尚、『講説』は正空から刈谷市の大悟寺の月海（円福寺六八世伝空隆道）へ、さらに一宮市の法円寺の錦空陽成に伝本している。

5 渡辺政春『西条吉良三十四番観世音菩薩順礼詠歌』宝曆二年（岩瀬文庫蔵）、中村為文・中村梯介共著『ふるさとの観音信仰と巡礼』昭和五四年。

6 石田茂作編『三河名数』六四〇六九頁、昭和五〇年。

7 詠歌の表記は、『法然上人三河二十五霊場巡拝の葉』による。寺院境内などにある「ミニチュア霊場」は含まない。

9 拙稿「法然上人二十五霊場の移し霊場」『中外日報』平成一二年一月二七日付、小笠原フヂ『宗祖大師二十五霊場巡拝奉納帳』大正二年（本応寺蔵）。

（付記）史料等を御提供下さった常光寺、桂岩寺、性源寺、誓満寺、普仙寺、本応寺の皆様にも、記して謝意を表します。

（キーワード）法然上人二十五霊場、うつし霊場、三河、巡礼

（佛教大学職員）

China and Japan.

36. Nichiren's *Chu-Hokekyō* and the Notes upon Which it was Based

SEKIDO Gyōkai

The *Chu-Hokekyō* is a work in 10 rolls in which Nichiren (1222-1282) added bibliographic reference data in the blank spaces of Lotus Sutra. Copies of the *Chu-Hokekyō* now known can be thought to have been made in the later years of Nichiren's life. Many examples of bibliographic notes in Nichiren's own hand are extant. Nichiren created the *Chu-Hokekyō* by putting his notes in order. However, earlier versions of the work in progress no longer exist. I therefore investigate the relation between the completed *Chu-Hokekyō* and the notes upon which it was based.

37. The Twenty-five Sacred Sites of Saint Hōnen in the Mikawa District

YAMAMOTO Hiroko

In Japan there are the twenty-five sacred sites where the twenty-five historical holy scenes of St. Hōnen's activities are imitated. From the end of the Edo period until the present, the twenty-five sacred sites were three times reconstructed in the Mikawa district. The areas where these sacred sites exist tend to expand with the passing of time. However, in districts where several of the sites exist next to each other, they tend to decrease. The expansion of the sacred sites at Mikawa, therefore, as compared with the nationwide situation, is a particular case.

38. How did Shōkū Define the Way to the Pure Land?

TU Yu-chan

Ōjō, which means to be born in the Pure Land after one's death in this world, is a serious issue that has been discussed for a long time. As one of the topics of Buddhist thought, Ōjō can be approached from various aspects. Ishii Kyōdō, a scholar who tends to discuss Ōjō in respect of its manner and value, suggests that Ōjō is not only a phenomenon of transition from a world to another, but should be most emphasized in its internal signification.